ゆる釈
むかし物語

牛車
と
三人
の
侍

光東夢慶

【未来今昔物語】シリーズ

人力発電所の真実 <http://p.booklog.jp/book/98813>

リアル戦争ごっこ <http://p.booklog.jp/book/99475>

牛と異星のアルダムラ

縦書き（画像版）版

<http://p.booklog.jp/series/detail/1565>

横書き（テキスト）版

<http://p.booklog.jp/series/detail/1535>

ゆる釈 むかし物語

牛車と三人の侍

今昔物語 卷第二十八第二

『頼光の郎等ども、紫野見物の語』より

むかしむかし、京の都に三人の侍がいました。名前は、
たいらのさだみち平貞道うすいさだみつ（碓井貞光）、たいらのすえたけ平季武うらべのすえたけ（卜部季武）、さかたのきんとき坂田公時（坂
 田金時）と言います。

この侍たち、酒呑童子退治や土蜘蛛退治などの伝説で
 知られた源頼光が率いた四天王の中の三人で、中でも
 金時公時は童話『金太郎』でも有名な人物です。

その風貌はきらきらと輝き、腕の立つ侍たちで、度胸
 もあって思慮深く、実直な性格だったと、物語では伝え
 ています。

また、『坂東武者』で知られた本場、東国でも活躍し、

人々に恐れ敬われた侍で、あるじの源頼光も有能な部下として、先陣を切らせたり、しんがり殿を任せられたりしたとも伝えられています。

さて、この三人、京の都は一条にある源頼光の屋敷にいました。

四天王のもう一人、みなもとのつな源綱（わたなべのつな渡辺綱）は、あるじ頼光の

お供に出かけていて昨日から屋敷をあけていました。

この日は、賀茂祭の『かえ返さの日』でした。賀茂祭は、現在、葵祭として知られています。

『返さの日』とは、祭りで神事を終えた巫女みことお付き

の女性たちが紫野という場所に帰る日です。華やかな若い女性たちが行列をつくり、京の街を通ります。

屋敷の一画から、男の声が聞こえてきます。

「さて、どうしよう……。どうやって、おなごたちを見

に行こうか……。兵どもつわもの三人が馬で連れ立って紫野まで

移動するのは、必死な感じがして恥ずかしいし……」

とまで言ったところで、野太い声の持ち主が話を引き取りました。

「……確かにそれは露骨だな。都の者に、『あれが東国の田舎侍か』などと指差されたくはない」

最初に切り出した男が再び口を開きます。

「……かといって、顔を隠して歩いて行くのも良い案ではなかろう……。とはいえ、おなごたちの行列は見たい。さて、どうするか……」

短い沈黙のあと、別の男の声が聞こえてきました。

「じゃあ、こうというのは……。『なんとか』とかいう偉いお坊さんがいたろう？ あの方から牛車を借りて見に行くのはどうだ？」

野太い声の男が言います。

「おいおい、俺たちや牛車なんて乗ったこともないし、

乗る作法も知らんのだぞ。京の都じゃ、都会じゃ……。血の気の多い若い殿様に因縁でもつけられて、供の者に牛車から引きずり出され、ボコボコにされたりでもしたらどうする？ 武士の恥であるし、つまらないことで死にたくはないぞ……」

牛車の案を出した男が応えます。

「じゃあ、おなごが乗っている車に思わせれば、多少の失礼があっても許されるのではないか？ 下簾したすだれを降ろして、着物の裾をちらりと垂らすなどしてさ……」

当時、女性が牛車に乗る際には、外側の簾すだれの内側に、

さらにもう一張、簾を垂らすならわしになっていました。これを下簾と言います。そのような牛車をおんなぐるま女車と呼んでいました。そして、たいていの女車は、下簾の隙間から女性物の着物の袖や裾をちらりと見せていました。

男性が乗る牛車を、女性が乗っているように見せかけるこの方法は、他の古典作品でも描かれています。

「おお！ それは妙案！ さっそく寺に使いを遣ろう！」
最初に話を切り出した男の弾んだ声が屋敷の中に響きました。

「女車か……。うゝむ、仕方なからう……。」

野太い声の持ち主も、しぶしぶ承諾したようです。

※※※

お寺から牛車がやってきました。

烏帽子に紺色の水干すいかんというおそろいの出で立ちで牛車

に乗り込む三人の侍たち。水干は、もともと庶民や子ども
の服装でしたが、平安時代も後期に入ると、その動き
やすさから武士たちに好んで着られるようになりました。
鎌倉時代の初めには正装にも使われるようになります。

牛車には下簾が下がっていました。女車によくあるように、簾から、着物の裾や袖がのぞいていません。初めて牛車に乗る三人は、緊張でそこまで気が回らなかったのかも知れません。しかし、それがかえって奥ゆかしい女車を演出していました。

「じゃあ、車を出してくれ」

「へーい」

最後に乗り込んだ侍の言葉に返事をする牛飼いの少年。やがて牛車がゆっくりと動きだしました。

一応ここまでは男たちの段取り通りです。

しかし、先ほども触れたように、三人とも牛車に乗るのは初めてでした。しかも、当時の牛車には、例えば台車に板バネのサスペンションや、車軸にベアリング、車輪に鉄輪といったものがついていません。さらに、道は石やアスファルトで舗装されてはいません。

現代人の感覚からすると、乗り心地は最悪だったことでしょう。

さて、物語では、牛車に乗った三人の様子を『物が入った容器にふたをして振ったように――』と描いています。当時の牛車の乗り方には、コツのようなものがあった

のかもしれません。激しく揺れる車の中で、三人の体は大きく振り回されていました。

「いたっ！」

頭を立て板にぶつかけたり、

「ぐわっ」

互いの頬が当たったり、

「うわっ」

仰のけ様に倒れたり、

「これはたまらん」

激しい振動に耐えられず、うつぶせの体勢になっても

前後左右に転がってしまおうのでした。

牛を引く牛飼いが、人が乗る部分である『屋形』やかたの方へ、ちらりと目をやりました。しかし、『車を止めろ』というような指示が聞こえてこないのです、そのまま牛を進めさせました。

やがて屋形から声が聞こえてこなくなりました。三人とも酔ってしまったようです。牛飼いの耳には、屋形がガタゴトと揺れる音と、車輪がギイギイときしむ音、サワサワとした街の音や人の声しか入ってきません。

一方、屋形の中には、四つんばいになりながら、顔を

青くして虚空を見つめている侍がいました。烏帽子が落ち、髻もつじがあらわになっています。

床に落ちた烏帽子が、激しい振動で小刻みに動いていました。

「おい、お主……」

と、一人が声をかけた次の瞬間、その侍は、四つんばいのまま、やにわに動くと、屋形の簾から顔を突き出しました。

ゴボツ……と、侍の喉がなるのと同時に、液体を口から踏み板に勢いよくぶちまけました。踏み板とは、乗り

降りに使うために、屋形の前後に渡した板のことです。

その様子を見ていたもう一人の侍から、悲痛な声がかかります。

「俺は降りる！」

「待て！　ここで降りたら、男だとばれてしまうぞ！」

そうこうしている間にも、独特の酸っぱい臭いが屋形の中にも漏れ漂ってきました。

「も、もう、ダメだ……」

残り二人も、次から次へと屋形から顔を突き出し、それぞれ前後の踏み板に液体をぶちまけました。いわゆる

『もらいゲロ』です。

踏み板に当たった吐瀉物が牛の尻にも付く勢いで飛び散っています。牛飼いは迷惑そうな表情を浮かべました。

一人の烏帽子は大きくずれ、残り二人の烏帽子は床に転がっていました。そろいの紺の水干は、よれよれになって、激しく乱れています。

ガタゴトと揺れる牛車。

ギイギイときしむ車輪。

過ぎていく京の街並み。

「あ、あまり……急ぐな……」

屋形から弱々しい声が聞こえてきます。

車を引いているのは足の速い牛でした。物語では、極めて優れた牛だったと伝えていきます。

三人の乗った牛車は、広い通りを同じ方向に進んでいく他の牛車をゆっくりと追い抜いていきます。

「そ……そんなに急ぐな！ ゆっくりでよいと言っておろう！」

ガタガタ、ギイギイ——牛車が立てる雑音に負けないよう、振り絞った声が屋形から聞こえてきます。

同じ方向に進む他の牛車に、歩きで供をしている者た

ちの耳にも、その声が入ってきました。女性が乗っているはずの牛車から、やや上ずった野太い声が聞こえてくるのです。

(この女車には、どんな女性ひとが乗っているんだろう……。東国のカラスが鳴き合っているような、ひどい声色だ
が……)

「あの車、どんな方がお乗りなのですかねえ？　男の声にも聞こえますが……」

「声からすると、どこか東国の娘さんじゃろう？　われらのあるじと同じく、祭りの行列に行くのであろう」

て……。とはいえ、男まさりの声じゃなあ……。」
 同じ方向に進む他の牛車の供の者たちが、怪訝けげんそうな表情で声を潜めて話しています。

やがて、牛車は目的地に到着しました。見物場所には、先着の牛車が、すでにちらほら並んでいて、葵祭の行列の到着を待っていました。

牛飼いは、車を牛から外すと、車の前に長く延びる二本の棒「轆ながえ」を、置台「榻しじ」の上に、静かに置きました。車に乗っている者たちは、車の中から行列を見物することになっています。

しかし、三人の男たちが乗る車からは、か細い声が聞こえてきました。

「あ、頭がぐらぐらする……」

「き、気分が……」

「す、全てが逆様さかさまに見えるようじゃ……」

長い間牛車に揺られ、すっかり酔ってしまったのです。

「お侍さん、大丈夫ですかい？」

様子を案じた牛飼いが車の外から声をかけました。

「われらのことは案ずるな。捨て置け……」

弱々しくも野太い声が返ってきました。牛飼いは、牛

を連れて一時その場を離れることにしました。別の場所で行列を見物するのもかもしれません。

物語の描写を現代の言葉に直せば、『尻を上につき出したような格好で――』侍たちはそのまま寝入ってしまいました。

ピューピュールルル……。どこか遠くから、トビの声
が聞こえてきます。

※※※

やがて通りが騒々しくなってきました。歓声の『波』が次第に近づいてきます。

葵祭の行列がやってきたのでした。

巫女の装束、神職の装束に身を包んだ若い女性たちが、晴れやかに通りを進んでいきます。

しかし、死んだように眠る三人の男たちの耳には、その歓声が届きませんでした。全く、気付きませんでした。屋形の外から、ギイギイと他の牛車が立てる甲高い音が、三人の耳に入ってきています。

ガタガタと他の牛車が動き始めた振動が、地面から自

分の頬に伝わってきます。

三人の男たちはようやく目を覚ましました。

「みんな、起きろ！」

最初に目を覚ました侍が体を起こし、他の者たちの体を揺すりました。

「ん？ おなごらの行列が通るのか？」

「いや……」

前簾の脇から外をうかがう一人の侍。その声はどこか寂しそうでした。

「終わったらしい……」

歩いてきた見物客の人影はすでにまばらで、他の牛車が三々五々見物場所を後にしていました。

「ええっ……!？」

「なんと……!？」

他の二人が驚きと嘆息の声を漏らしました。

「あのお……、お侍さん、そろそろ車を出しますが……」
と、外から牛飼いの声が聞こえてきます。

「う、うむ……。しばし待て……」

と、答えた野太い声の持ち主は、次に仲間たちに向かって話しかけました。

「さて、どうする……。このまま車に乗って帰るのか？」
「ま、待ってくれ、まだ気持ちが悪くて頭がまわらん」
「ええっ、本当に終わってしまったのか？ 何だか腹立たしいというか……。悔しいというか……。なんのためにわれわれは……」

野太い声が話を進めます。

「どうする？ 帰りもあの速さでガタガタと揺らされたら……」

「……生きた心地はせぬな」

「千人の軍勢の中に馬で突っ込んだとしても、いつもの

ことで、何とも思わぬが……」

「……あの牛飼い一人に、してやられるとは、屈辱」

「ならば、しばらく、ここでじっとしていいようではないか。人通りが少なくなっただとところで目立たぬように歩いて帰る。どうだ……?」

野太い声の男の提案に、他の二人もうなずきました。

※※※

見物客がすっかりいなくなっただとところで車から降りる

三人の侍たち。草鞋を履き終え、腰を上げた男たちは、人相がわからないよう烏帽子をまぶか目深にかぶっていました。

「ご苦労だったな。日々の鍛錬のため、歩いて帰ることにした。礼は一条にあるせつつのかみ摂津守様の屋敷まで取りに来な

さい」

「へい」

侍の一人が牛飼いにそう言うと、その場から離れるよう仲間たちを促しました。

「いくぞ、顔を隠せ！」

侍の押し殺した声は、車を牛につなげる少年には、幸

い届きませんでした。

三人の侍は、扇で顔を隠しながら、源頼光の屋敷に向かつて、こそこそと小走りで帰っていったということでした。

※※※

今昔物語では、野太い声の持ち主、平季武たいらのすえたけが、後にこう語ったと伝えています。

「勇猛な兵つわものといえども、戦いくさに車は不用のものにございませぬ。あの出来事のあと、こりにこりて、牛車にはもう二

度と近づきたくもありません」

そして、物語はこう締めくくっています。

——勇猛果敢で思慮深い人たちであっても、牛車に一度も乗ったことがないばかりに、悲しくも乗り物酔いして死ぬ思いをすることになってしまった。ばかばかしい話である。

(了)

ゆる釈・むかし物語【縦組版】牛車と三人の侍

<http://p.booklog.jp/book/99742>

最後までお読みいただきまして誠にありがとうございました。

この場をお借りして他の作品も紹介させていただきます。

【未来今昔物語】シリーズ

人力発電所の真実 <http://p.booklog.jp/book/98813>

リアル戦争ごっこ <http://p.booklog.jp/book/99475>

牛と異星のアルダムラ

縦書き（画像版）版 <http://p.booklog.jp/series/detail/1565>

横書き（テキスト）版 <http://p.booklog.jp/series/detail/1535>

著者：慶

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kohtohmookay/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99742>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99742>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ